

# 中世女流日記にみる「雅び」

——「雅び」の崩壊と継承（承前）——

沼 波 政 保

はじめに

日本中世の精神文化論の一つとして「雅び」について論じるが、前稿<sup>①</sup>においては専ら平安王朝貴族社会の人々の規範もしくは基準が「雅び」であったと捉えて大略次のように論じた。

すなわち、平安王朝社会には、一定の規範・基準があった。それは、美意識に基づく、言わば品格の保持といふべきものであり、それに外れることは下品なことになる。それは、教養があり、それに基づいた会話のやりとりができ、一挙手一投足に気品があり、しかも、これは努力ではどうにもならないことではあるが、家柄、官位官職、容貌なども重要な要素として優れているに越したことはない、というものである。否、それどころか、その規範・基準は彼らの生活全般に亘っていたと言っても過言ではない。しかもそれは、すべて美意識として認識され、王朝

貴族としての誇りとして、他への優越性として、保持されなければならないことであったのである。これが「雅び」の粹である。この「雅び」の粹が厳然としてあったのであり、この粹を逸脱することは人間的価値が否定されることに直結することであったのである。そして、この粹外に存在した階級の人々も、自分たちが区別されていることを、一種の諦めをもって甘受していたのである。

さらに、秋山 虔氏の『伊勢物語』についての御説<sup>⑥</sup>にもあったように、「雅び」は本来「したたかな反俗の精神」の表れであり、世俗の政治における権力構造とは一線を画すものであった。それは「雅び」が和歌の伝統的美意識から生まれたものであったからであるが、しかし、この「反俗の精神」は次第に「雅び」の中から姿を消し、逆に、「雅び」は貴族社会の權威の表象と変化していったのである。

拙稿はこの考察を承けてのものである。

## 一

『建礼門院右京大夫集』は、恋人平資盛を壇の浦に失った右京大夫が折々にしたためたものを晩年にまとめた日記である。

高倉の院御位の頃、承安四年などいひし年にや、正月一日中宮の御方へ、内の上、わたらせ給へりし、おほんひきなほしの御姿、宮の御物の具召したりし御さまなどの、いつと申しながら、目もあやに見えさせ

給ひしを、物のとほりより見まゐらせて、心に思ひしこと。

雲のうへにかかる月日のひかり見る身の契りさへうれしとぞ思ふ<sup>⑧</sup> (二)

十七・八歳頃に建礼門院のもとに宮仕えにあがった作者は、高倉帝と徳子中宮の美しい姿に感動し、そういう境遇にあることを「うれし」とまで思うのであった。ここで作者は、高倉帝の「おほんひきなほしの御姿」、中宮の「御物の具召したりし御さま」が「目もあやに見え」なされたと言う。つまり、その装束に注目しているのである。

おなじ春なりにしや、建春門院、内裏にしばしさぶらはせおはしまししが、この御方へいらせおはしまして、八条の二位殿、御まゐりありしも御所にさぶらはせ給ひしを、御匣殿の御うしろより、女院、紫のにほひの御衣、山吹の御表着、桜の御小桂、青色の御唐衣、蝶をいろいろに織りたりし召したりし、いふかたなくめでたく、若くもおはします。宮は、つぼめる色の紅梅の御衣、樺桜の御表着、柳の御小桂、赤色の御唐衣、みな桜を織りたる召したりし、にほひ合ひて、今さらめづらしくいふかたなく見えさせ給ひしに、おほかたの御所のしつらひ、人々の姿まで、ことにかがやくばかり見えしをり、心にかくおぼえし。

春の花秋の月夜をおなじをり見るこちする雲のうへかな (三)

建春門院と中宮の装束の華やかさをはじめ、宮中の飾りつけやそこに居る人々の姿の美しさに感嘆しているのである。

このように装束の美しさを讃えたものは、

二藍の色濃き直衣、指貫、若楓の衣、その頃の単衣、つねのことなれど、色ことに見えて、警固の姿、まこ

とに絵物語いひたてたるやうにうつくしく見えて（六・詞書）

と維盛の姿に感嘆しているように、男性に対しても同様であるが、装束を中心とした美意識は、王朝女流日記や『枕草子』などにも頻繁に見られた感覚と同じものであり、前代の感覚と全く同一である。

頭中将実宗の、つねに中宮の御方へまゐりて、琵琶ひき歌うたひ遊びて、ときどき、「琴ひけ」などいはれしを、「ことさましにこそ」とのみ申して過ぎしに、あるをり文のやうにて、ただかく書きておこせられたり。

松風のひびきもそへぬひとりことはさのみつれなき音をやつくさむ（四）

かへし

世のつねの松風ならばいかばかりあかぬしらへに音もかはさまし（五）

琵琶の名手として名高かった西園寺実宗から琴を弾けと言われた作者が巧みにかわすやりとりの一場面であるが、合奏といい、機智に富んだ和歌の遣り取りといい、見事に「雅び」の枠に合致したものである。

いつの年にか、月明かりし夜、上の御笛ふかせおはしましたが、ことにおもしろく聞えしを、めでまゐらすれば、「かたくなはしきほどなる」と、この御方にわたらせおはしましてのちに、語りまゐらせさせ給ひたりけるを、「それはそら事を申すぞ」とおほせ事あるとありしかば、

さもこそは数ならずとも一すぢに心をさへもなきになすかな（一二）

とつばやくを、大納言の君と申ししは、三条内大臣の御女とぞ聞えし、その人、「かく申す」と申させ給

へば、笑はせおはしまして、御扇のはしに書きつけさせ給ひたりし、

笛竹のうきねをこそは思ひ知れ人の心をなきにやはなす（一三）

この場面などは、『枕草子』に見る定子中宮の後宮や『紫式部日記』の彰子中宮の後宮を彷彿とさせる。

恋に悩み苦しむ同僚を見るにつけ「なべての人のやうにはあらじ」と思っていた作者であったが、やがて一人の男性との恋に落ち、それに伴う悩み苦しみを味わう身となっていくのである。

なにとなく見聞くごとくに心うちやりて過しつ、なべての人のやうにはあらじと思ひしを、あさゆふ、女  
どのやうにまじりて、みかはす人あまたありし中に、とりわきてとかくいひしを、あるまじきことや  
と、人のことを見聞きても思ひしかど、契りとかやはのがれがたくて、思ひのほかに物思はしきことそひ  
て、さまざま思ひみだれし頃、里にてはるかに西の方をながめやる、こずゑは夕日のいろしづみてあはれ  
なるに、またかきくらししぐるるを見るにつけても、

夕日うつるこずゑの色のしぐるるに心もやがてかきくらすかな（六一）

相手は平資盛であった。その恋も、藤原隆信が加わっての一時のもつれも含めて、前代のもと変わるところは  
なく、作者の宮仕えの生活は「雅び」の枠内そのものであった。

このように『建礼門院右京大夫集』において、少なくとも資盛が壇の浦で亡くなるまでは、徳子中宮の後宮にい  
た作者であるから当然といえば当然だが、平安王朝社会の「雅び」をそのまま継承されているといえよう。異なる  
のはその後宮に出入りするのが貴族化した平家の人々であり、彼らが武士であったことぐらいである。

## 二

『とはすがたり』は、後深草院に愛されつつも多くの男性との恋も重ねた二条の半生をみずから綴ったものである。

母を幼くして亡くし父大納言久我雅忠に溺愛されて育った作者は、四歳から後深草院の御所に出入りし、「あが子」と呼ばれて院にもかわいがられた。しかし、やがて作者十四歳の時、強引に院と契りを結ばされるのである。

実家に帰っていた作者のところへ院が来訪される。そして院は作者と契りを結ぼうとされるが、作者は必死に拒む。しかしその翌日、院は再び来訪され、作者の部屋へ入ってこられた。

かくて日暮し侍りて、湯などをだに見入れ侍らざりければ、「別の病にや」など申し合ひて、暮れぬと思ひし程に、「御幸」と言ふ音すなり。またいかならんと思ふ程もなく、引き開けつつ、いと慣れ顔に入りおはしまして、「悩ましくすらんは、何事にかあらん」など御尋ねあれども、御答へすべき心地もせず、ただうち臥したるままにてあるに、添ひ臥し給ひて、さまざま承り尽すも、今やいかがとのみおぼゆれば、「なき世なりせば」と言ひぬべきにうち添へて、思ひ消えなん夕煙一方にいつしかなびきぬと知られんもあまり色なくやなど、思ひわづらひて、つゆの御答へも聞えさせぬほどに、今宵はうたて情なくのみ当り給ひて、薄き衣はいたく綻びてけるにや、残る方なくなり行くにも、「世に有明」の名さへ恨めしき心地して、

心よりほかに解けぬる下紐のいかなる節に憂き名流さん

など思ひ続けしも、心はなほありけると、われながらいと不思議なり。(巻一)

作者は何も答えずにいたが、院の強引な行動によって、遂に契りを結んでしまったのである。このあまりにも露骨な描写は明らかに「雅び」の枠を逸脱するものである。

かかるほどに、二十日余りの曙より、その心地出で来たり。人にかくとも言はねば、ただ心知りたる人、一、二人ばかりにて、とかく心ばかりは言ひ騒ぐも、亡き後までもいかなる名にかとどまらんと思ふより、なほざりならぬ心ざしを見るにも、いと悲し。いたく取りたる事なくて、日も暮れぬ。火ともす程よりは、ことのほかに近づきておぼゆれども、ことさら弦打もせず。ただ衣の下ばかりにて、一人悲しみるたるに、深き鐘の聞ゆる程にや、あまり耐へがたくや、起き上るに、「いでや、腰とかやを抱くなるに、さやうの事がなき故に、滞るか。いかに。耐ふべき事ぞ」とて、かき起さるる袖にとりつきて、ことなく生れ給ひぬ。(巻

一)

恋人である雪の曙の子を宿した作者が院に隠して出産する場面だが、雪の曙に後るから抱えられて出産する姿を描写している。出産の様子を具体的に描写することなどは、平安王朝社会において到底あり得ないことである。これまた、「雅び」の枠を逸脱しているものであることは明らかである。

そのほかの出産場面をはじめ、懐妊を示す性夢、また多くの男性と契りを交わす場面など、同様に「雅び」の枠を逸脱している描写は少なくない。そして何よりも、院に愛されながらも雪の曙、有明の月、亀山院、近衛大殿と

次々に、時には重なっての交渉を、ともすれば露骨とも言える描写で語っていること自体が前代の女流日記には見られないことである。それは「雅び」の枠を逸脱することであるからこそ前代には語られなかったのであり、換言すれば、描写も含めて『とはずがたり』で語られていることが「雅び」の枠を逸脱しているのである。さらに言えば、女性である作者が出家後、いわゆる「女西行」というべく諸国を旅して歩くのも、「雅び」の枠に収まるものではない。

しかし一方、東二条院の御産、後嵯峨院の崩御とそれに続く葬送の場面（以上、巻一）、両院の蹴鞠の場面、蹴鞠に負けた亀山院が負けわざとして六条院の女楽を真似た場面（以上、巻二）、北山准后の九十の御賀の場面（巻三）などにおいては、後深草院の御所をはじめとする貴族社会での行事・出来事であるため当然ではあるが、儀式作法、装束、詩歌管弦、舞楽等々、平安王朝社会と同じ基準でもって語られており、ここには「雅び」の枠は継承されているのである。

## 三

『うたたね』は阿仏尼の若い日の失恋の記である。

物思ふ事の慰むにはあらねども、寝ぬ夜の友と慣らひにける月の光待ち出でぬれば、例の妻戸押し開けて、たゞ一人見出したる。荒れたる庭の秋の露、かこち顔なる虫の音も、物ごとに心を痛ましむるつまとなりけ



れば、心に乱れ落つる涙ををさへて、とばかり来し方行く先を思ひ続けるに、さもあさましく果無かりける契りの程を、など、かくしも思ひ入れけん、我心のみぞ、返すく恨めしかりける。

夢うつゝとも分きがたかりし宵の間より、関守のうち寝る程をだに、いたくもたどらずなりにしにや、打しきる夢の通ひ路は、一夜ばかりの途絶えもあるまじきやうに慣らひにけるを、さるは、月草のあだなる色を、かねて知らぬにしもあらざりしかど、いかに移りいかに染めける心にか、さもうちつけにあやくなりし心迷ひには、「伏柴の」とだに思ひ知らざりける。(一五八頁)

冒頭の一節である。失恋に傷心した心境を作者みずから語っているが、平安王朝社会における女性の恋と変わることなく、また、『伊勢物語』や勅撰集を踏まえての描写などにも「雅び」の基準に合致している。ここだけに限らず、全篇において「雅び」の粋は守られている。それは、養父について遠江に下る場面にも見ることができ。

洲侯とかや、ひろくとおびたゝしき河あり。往來の人集りて、舟を休めずさしかへる程、いと所狭うかしがましく、恐ろしきまでののしりあひたり。からくしてさるべき人皆渡り果てぬれど、人々も興や馬と待出づる程、河の端に下りゐて、つくぐと来し方を見れば、あさましげなる賤の男ども、むつかしげなる物どもを舟に取り入れなどする程、何事にかゆしく争ひて、あるひは水に倒れ入りなどするにも、見慣れずもの恐ろしきに(一七二頁)

この場面をはじめ、道中至る所で、作者は下賤の人たちの姿に驚き、時には恐ろしくさえ思うが、それは作者の中に「雅び」の粋が存在することを意味し、その粋に収まらない人たちを見るにつけ都から遠く離れたことを嘆き

悲しむのは、「雅び」の枠の中にいるべき自分がその外に存在することを嘆いているのである。

しかしまた、「雅び」の枠を逸脱する面も見られる。

人は皆何心なく寝入りぬる程に、やをらすべり出づれば、灯火の残りて心細き光なるに、人やおどろかんとゆゝしく恐ろしけれど、たゞ障子一重を隔てたる居所なれば、昼より用意しつる鋏、箱の蓋などの、程なく手にさはるもいと嬉しくて、髪を引分くる程ぞ、さすがそゞろ恐ろしかりける。削ぎ落しぬれば、この蓋にうち入れて、書き置きつる文なども取り具して置かんとする程、出でつる障子口より、火の光のなをほのかに見ゆるに、文書きつくる硯の蓋もせで有けるが傍に見ゆるを引寄せて、削ぎ落したる髪をおし包みたる陸奥国紙の傍に、たゞうち思ふ事を書きつくけれど、外なる灯火の光なれば、筆の立所も見えず。(一六三〜四

頁)

失恋の痛手から出家を思い立った作者は、春のある日、誰もが寝静まった夜中にみずから髪を切るのである。そして出奔し雨の中を西山の尼寺へ辿り着くのである。揺れる灯火のもと、鋏でみずから髪を切る音が聞えて来そうな描写は背筋が寒くなるほどであるが、みずから髪を切って夜中にもかかわらず雨の中を一人懸命に西山の寺へ急ぐ姿は、『蜻蛉日記』の作者が夫兼家の不誠実から山寺に籠ったとはあまりにも似て非なる行動である。つまり、『うたたね』作者のこの一連の行動は「雅び」の枠を外れたものであると言わざるをえない。

すなわち、『うたたね』においては、基本的には「雅び」は継承されているが、一部にその枠を外れる面も見られるのである。

#### 四

『十六夜日記』において作者阿仏尼は、我が子為相のために鎌倉まで訴訟の旅に出る。

さて又、集を撰ぶ人は例多かれど、二度勅を承けて世々に聞え上げたる家は、類猶ありがたくや有けむ。其跡にしもたづさはりて、三人の男子共、百千の歌の古反古どもを、いかなる縁にかありけん、預り持たる事あれど、道を助けよ、子を育め、後の世を弔へとて、深き契を結び置かれし細川の流れも、故なくせきとゞめられしかば、跡弔ふ法の灯も、道を守り家を助けむ親子の命も、もろともに消えを争ふ年月を経て、危うく心細きながら、何としてつれなく今日まで永らふらん。惜しからぬ身一つは安く思捨れども、子を思ふ心の闇は猶忍びがたく、道をかへりみる恨はやらん方なく、さても猶東の亀の鏡に映さば、曇らぬ影もや顕はるゝと、せめて思ひ余りて、よろづの憚りを忘れ、身をよくなきものになし果てて、ゆくりもなく、いざよふ月に誘はれ出なんとぞ思ひなりぬる。(一八二―三頁)

日記冒頭から亡夫為家の譲り状が長男為氏によって履行されないことを嘆き、朝廷での裁きでも望む結果が得られなかったことから、幕府への訴訟へと進む心情が語られている。ここで作者は、和歌の家としての御子左家を誇り、その家を守り歌道を守っていくことが亡夫為家の遺言であったことを、まず語る。そしてそれが今や為氏の横暴によって風前の灯であることを嘆き、よって幕府へ訴えに出かける決心をしたと語る。

たしかに鎌倉下向の直接の動機は播磨国細川荘をめぐっての為氏との領有権争いであり、我が子が相を思う母心も強く見られるが、一方、作者は亡夫より託された歌道・和歌の家を守ることに悲壮なまでの決意を固めている。

和歌の家に在る身とはいえ、また我が子への深い思いが大きいとはいえ、和歌の道を守り和歌の家を守ろうとするところに、「雅び」であるところの和歌の伝統を守ろうとする思いが感じられるのである。

そのほか、旅の道中や鎌倉滞在中も、全体を通じて、古典を踏まえての記述がなされ、作者の教養をうかがわせる文章を綴っているが、その記述の内容の発想も「雅び」の枠の内におさまっている。

しかしまた、我が子への愛情ゆえとはいいながら、女の身で一人鎌倉まで出かけようとし、実際に出かけて行くのは、王朝貴族社会では考えられないことである。女の身で单身東国へ行くことは「雅び」の枠を逸脱した行為であると云わざるを得ない。

すなわち、『十六夜日記』においては、全体的に「雅び」が継承されていると言えるが、作者のとった行動は「雅び」の枠を逸脱したものである。

## 五

如上、中世の女流日記の主なものについて見てきたが、『とはずがたり』における作者の男性遍歴や描写、『うたね』『十六夜日記』における作者の行動に「雅び」の枠を逸脱する面が見られるものの、概ね「雅び」は前代を

継承していると言えよう。今回考察の対象としなかった『弁内侍日記』や『中務内侍日記』・『竹むきが記』などにおいても同様である。

ならば、中世の女流日記は「雅び」を継承していると言い切ってよいのであろうか。「雅び」の枠を逸脱するものの、「雅び」の崩壊は取るに足らないものであろうか。

先に、「雅び」は規範・基準となつて貴族社会の人々の生活全般に亘つていたと言つても過言ではなく、しかもそれは、すべて美意識として認識され、貴族としての誇りとして、他への優越性として、保持されなければならないことであつたと述べた。

たしかに、和歌とか装束とか詩歌管弦などといった個々の面における美意識としては、中世の女流日記に「雅び」の枠は継承され存在していた。しかし、作者たちの行動、もっといえば、彼女たちの生き方において、平安王朝社会における「雅び」と大きく異なるものが存在していたのである。

『建礼門院右京大夫集』及び『とはずがたり』については、作者の人間観という観点からかつて考察したことがあるので詳しくはそちらに譲るが、まず、右京大夫にとっては、恋人資盛が一門の人々と共に都落ちして行き、やがて壇の浦で入水して命を閉じて以後こそが、彼女の人生そのものであつた。つまり、彼女の人生は、資盛を失つた二十八歳ごろから晩年までがすべてであり、それはこの世にもはやいない資盛を想つて生きたものであつたのである。

そういう彼女は、資盛死後、出家するでもなく、他の男性の庇護を受けることもしなかつた。たしかに、都落ち

にあたって資盛が言い残したこともあって、彼女は彼の菩提を弔うことに懸命になっている。しかし、出家し尼となって亡き恋人の後世を祈る生き方はしていない。時には死んでしまいたいとか尼になりたいなどと思うこともあったが、結局は出家することなく晩年まで生きたのである。なぜ出家しなかったのか。それは出家して尼になることは女性の身を捨てることになるからである。出家の世界には世俗の男女の別はない。彼女にとって尼となって恋人資盛の後世を祈ることは、資盛との恋愛関係がなくなることを意味する。彼女はその道を選ばず、どこまでも彼との恋愛関係を継続すべく、出家しなかったのである。つまり、たとえ資盛がこの世に存在しなくとも、彼女はどこまでも資盛と共に生きようとし、その通りに晩年まで資盛をずうっと想い続けて生きたのである。

さて、このような生き方は王朝貴族社会の女性には見られない。想う人に先立たれた場合、王朝社会の女性は大別して出家するかそれとも他の男性の庇護を受けることになる。しかし右京大夫はそのどちらでもなく第三の道を選び取った、最後まで資盛との恋愛を全うするために。これは明らかに「雅び」の枠を逸脱する生き方である。

また右京大夫は、序と跋で共に「わが目ひとつに見むとて」書き綴ったと語っている。この言葉は、みずからの人生を確かに生きたことを、みずからの心の内で確認したいという思いを語るものである。しかもその人生は資盛を想ったのものであった。その生死とは関係なく、資盛と共に生きたみずからの人生を、みずから確認したいために『右京大夫集』を書き綴ったのである。それはまさに生きた証しであった。

このようにみずからの人生を捉え、みずからの心の内に確認することは、今まで生きてきたみずからの人生を肯定しているものといえよう。また、そのように生きた我が身を肯定的に評価しているのである。たしかにその人生

は、「あはれにも、かなし」いものであったが、同時にそれは「忘れがたくおぼゆる」(一)ものであった。そういう我が人生、またそのように生きた我が身を肯定し、誇らしくも思い、みずからに確認しようとしたのが、『右京大夫集』なのである。

## 六

華やかなというべきか、奔放なというべきか、多くの男性遍歴を重ねて来た『とはすがたり』の作者二条は、後深草院によって御所を追われた後は尼となって諸国を旅して歩いたわけだが、院こそが片時も忘れることのない存在であり、心から愛し、頼みに思っていた存在であった。その証左が、院のご病気に続く葬送の場面での、悲しみのであまり体裁もかまわず取り乱した様子でひたすら葬列を追うという行動である。つまり、作者は院と再会するまでは気づかなかつたが、再会、再度の再会、そして崩御によって、自分が今まで無意識のうちにも院を愛し、院を支えとして生きてきたことに初めて気づいたのである。しかし、気づいた時には、院はずでにこの世の人ではなかった。失ってみて初めてその存在の大きさに気づいたのである。

『とはすがたり』跋にあたる部分で二条は、自分の今まで生きてきた人生を心中深くに沈潜させておくことではない、また修行を思い立つに至ったことも無駄にしないために、綴ったのだと言う。すなわち、誰に問われるのでもなく、自ら語らずにはおれない思い、しかもその内容は、自らが修行へと向かうに至った事情、つまり、自分

の歩いてきた人生そのものである。それは、五十歳を目前にして初めて気づいたところの、無意識のうちに後深草院を頼みにし、支えにしてきた人生であった。

しかし、そのような人生であったと気づいた今、その院ももうこの世におられない。これからは自分一人で歩いていかなければならないのである。そこで、これからの後半生を歩み出すにあたって、自分一人で歩んでいくためにも、今までの半生を自らの目で確認しておきたいと思ったのである。そしてその半生は、振り返ってみると、院によって支えられて生きてきた人生であった。しかも、その半生は反省後悔するものではなく、確かに自分の人生であったという思いがある。つまり、決して自分の人生を否定するのではなく、むしろそういう人生であったと、そのまま肯定的に捉えていることがうかがえるのである。そして、その半生を肯定的に捉え、確認することによって、これからの後半生を今度は一人で生きていこうとするのである。これからの後半生を前向きに生きていこうとする時、誰に語るのでもないが、問われずとも語らずにはおれない気持ち、それがこの『とはすがたり』執筆の動機であり、題名の所以なのである。『建礼門院右京大夫集』の「我が目ひとつに見むとて」と同じ意図であると言えよう。

すなわち、作者は、無意識のうちにも後深草院を支えにし、院とともにあつた自らの半生を決して後悔すべきものとして否定していない。むしろそのように生きたということをもそのまま捉えて確認しようとしているのである。



## 結

このように、『建礼門院右京大夫集』や『とはすがたり』においては、みずからの人生を肯定的に捉えている。すなわち、長い人生の中には様々な苦しいこと、辛いことも多く、時には失敗もあり、後悔することもあるのであるが、しかし、そのような中で懸命に生きているのが人間であり、そのように生きることを前向きに捉え、さらにはそのような生きてきたことに誇りさえもっているのである。

このような『右京大夫集』や『とはすがたり』は、平安王朝時代の女流日記とは趣をことにしている。平安時代の女流日記は、『蜻蛉日記』や『更級日記』を例に挙げるまでもなく、我が身、わが人生を嘆いたり、後悔したりする趣のものである。それはそれで、一人の女性の人生における悩み、苦しみ、辛いことについての心裡が如実に表現され、文学性の高いものではあるが、みずからの人生を肯定的に捉えたものではない。この点、中世女流日記の特色の一つと言え、このようなみずからの人生の捉え方は王朝貴族社会の「雅び」の枠の外に位置するものとも言えようが、それ以上にそこには、みずからの人生をみずから選び取ろうとする姿勢が見られるのである。

みずからの人生をみずから選び取る、また選び取ろうとすることは、平安王朝社会の女性にあってはあり得ないことであり、いや、許されないことであった。その点、これは明らかに「雅び」の枠を遥かに超えたものであるといえよう。

『うたたね』の作者が深夜、ゆらめく灯の下でみずからの髪を切り、雨夜の中を出奔したのも、また阿仏尼が我が子への深い愛情と亡夫に託された和歌の家を守るといふ強い思いから女の身で鎌倉まで下向したのも、そこにはみずからの人生をみずからの意思で生きようという思いの表われであったと考えるのである。また『うたたね』の末尾には失恋の痛手を癒すべく養父に伴われて遠江まで行った作者が都に戻ってきた時の心境が語られているが、そこには一つの恋を過去のものとして、これからまた前向きに生きて行こうとする、台風一過に似た清々しささえ感じられる作者の姿をうかがうことができる。『右京大夫集』や『とはすがたり』ほど明確には表われてはいないが、これまた平安時代の女流日記とは異なった生き方へのベクトルを感じることができるのである。

みずからの人生を肯定的に捉え、前向きに生きて行こうとするところに、私ははっきりとしたかたちでの自我の芽生えを見るのであるが、これは、右京大夫や二条や阿仏尼だけではなく、例えば北条政子や時代が下って日野富子らを筆頭に『平家物語』中の女性など、中世の女性に多くみられるものである。もちろんその背後には時代背景<sup>⑤</sup>があり、武士にとって代わられた貴族階級の人々にとっては、平安時代の華やかな全盛期はもはやなく、自己存在そのものを問わざるを得なくなったのである。そしてそこから無常観が切実なものとして受け容れられ、一方では自己凝視、人間凝視が強まったのである。そういう時代背景の中で、中世の女性たちもその人生観において大きく変化していったのである。

すなわち、中世女流日記においては、一部逸脱する面が見られるものの概ね前代の「雅び」の枠を継承しているといえるのであるが、どう生きるかという作者たちの人生観に関わるところにおいてはすでに「雅び」の枠は消滅

もしくは崩壊しているといえるのではないかと考える。ところが、「雅び」の粹を逸脱することは、平安時代の貴族階級の人々にとっては人間的価値が否定されることに直結することであった。しかし、それほどまでに厳しい粹を敢えて逸脱するほどに、この時代の人々にとっていかに生きるかということとは大きな問題だったのである。もちろん、それは前述の如く時代の変化が最も大きな要因であったのである。

一方、今回は対象としなかったが、『弁内侍日記』、『中務内侍日記』、『竹むきが記』などにおいては、それほどまでに顕著なものは見られないのも事実である。むしろ「雅び」の粹を守ろうとする傾向がみられる。これは、先に触れた時代背景の中で、政治、経済、社会のあらゆる面で武士にとって代わられ没落の一途を辿る貴族階級にとって、優位性を保てるのは唯一、「雅び」のみであった。すなわち、貴族としての誇りとして、他への優位性として、保持されなければならなかったのが「雅び」であったのである。つまり、同じ時代背景の中で、「雅び」は、その粹を継承していると言い得るものと、崩壊しているもしくはその兆しが見られるものとに分流しているのである。

日本中世の精神文化論の一つとしての『雅び』の崩壊と継承を論じる一環として、今回はその中の中世女流日記について考察したが、和歌・随筆・軍記物語・説話集等々まだ考察しなければならないものは多い。今後を期したい。

## 注

- ① 拙稿『雅び』の崩壊と継承——日本中世精神文化論(一)——『同朋文学』第三十一号(二〇〇三年三月・同朋大学日本文学会)所収) 参照。
- ② 新日本古典文学大系本(岩波書店)「解説」三七二―五頁。  
引用に用いた本文は次による。
- ③ 『建礼門院右京大夫集』……………新潮日本古典集成本(新潮社)  
・『とはずがたり』……………同右  
・『うたたね』……………新日本古典文学大系『中世日記紀行集』(岩波書店)  
・『十六夜日記』……………同右
- ④ 拙稿「中世女流日記にみる人間観——『右京大夫集』・『とはずがたり』について——」(『同朋大学論叢』第八十五・八十六合併号(二〇〇二年六月・同朋大学同朋学会)所収) 参照。
- ⑤ 時代背景については、拙稿「中世文学についての覚え書き——中世文学を底流するもの——」(『同朋学園佛教文化研究所紀要』第三号(昭和五十六年三月)所収) 参照。